



主張

特效薬はないけれど

吉野 雅彦

今日の中学校教育を取り巻く課題といえば、新学習指導要領の全面实施を受けての学習指導と評価の工夫改善であったり、いじめや不登校、インターネットの利便性と裏表のトラブルなど生徒指導上の問題であったり、働き方改革の推進であったり、それぞれの学校を預かる校長として、いくつもの項目が思い浮かぶことと思います。さらに、経験したことのない新型コロナウイルス感染症への対応は、地域差はあれ生命に関わる喫緊の問題ですし、それに伴い前倒しで進められているGIGAスクール構想をどう具体の学習に活用するかという新しい課題もあります。校長には生徒や地域、職員など学校の実態を踏まえた明確なビジョンをもち、リーダーシップを発揮して、組織を生きたものとして活性化させ、これらの課題に取り組んでいくことが求められています。

これらの課題のうち、社会状況が変化しても常に悩ましい問題の一つとして、「いじめ」があります。五月の全日中第七二回総会時の文部科学省説明にもありましたが、いじめを認知した件数には、都道府県によりまた学校により、大きな差異があり、認知ゼロの学校が一六%ほどある一方で、認知があった学校では平均二〇件（令和元年度 生徒指導上の諸課題に関する調査）とのことです。校内の生徒指導体制や教員個々の感度にもよるでしょ



うが、管理職の姿勢も認知の感度に大きく影響すると思われます。

また、いじめは対人関係上の問題であり、いじめる側といじめられる側のみならず、はやし立てるとか見て見ぬふりをするなどの周囲の側の存在によって成り立っています。ちなみに、校長先生方が生徒同士の望ましい人間関係づくりに効果的であると考えているものとして、学年・学級活動、授業におけるコミュニケーション、学校行事、体験的活動などが上位にあるようです（全日中令和二年度調査研究報告書）。

私の勤務校では、春と秋に「人権週間」を設定しています。今年度はどんな指導がされているのかと思ひ、教室訪問をしたところ、若手の担任の先生も含め、「人権感覚育成プログラム」（埼玉県教育委員会）を活用してアクティビティーを取り入れた授業を実践していました。人権感覚とは、「人権が擁護され、実現されている状態を感知して、これを望ましいものと感じ、反対に、これが侵害されている状態を感知して、それを許さないとする。価値志向的な感覚。人権感覚が知的認識とも結びついて、問題状況を変えようとする人権意識又は意欲や態度になり、自分の人権とともに他者の人権を守るような実践行動に連なる。」（人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕）ものです。いじめへの対応といつても、特効薬があるわけではありません。とどのつまり、普段の学級経営や生徒指導そして特別活動、特別の教科道徳などあらゆる機会を捉えて、自分とともに他者を尊重する精神を涵養していくほかないのではないのでしょうか。それには、冒頭で触れたいじめを認知する感度も含め、教師のそして校長の人権感覚はどうなのだろうか、私自身も改めて自分を見つめなおしてみなければと、今、感じています。

（全日中副会長・埼玉県深谷市立花園中学校長）